

由布コミュニティ(地域の底力再生)事業

【 研 究 報 告 】

株式会社ワーキングルーム

事業の概要

1. 事業の背景

地方分権による権限委譲が進み、市町村合併も進展してきたなかで、これからの地域づくりは行政主導でなく、地域で暮らす住民が主体的に考え参加し、積極的に役割を担うことが求められている。

由布市は、少子高齢化により過疎化が進行する中山間地域を多く抱える一方、県都大分市と隣接し人口流入の比較的多い地域もある等、多様な特性を持った地域で構成される。

近年、伝統文化の継承、環境の整備、農地の保全、福祉の充実、教育・スポーツなど、今後、地域が存続していくために解決しなければいけない様々な問題が顕在化してきた。

そのため、住民一人ひとりが地域に対して愛着と関心を深め、地域の諸問題の解決に向けて力を合わせていくことが必要となっている。

2. 事業の目的

本事業は、「自分たちが住んでいる地域の現状を把握し課題を見つけ、自分たちで解決策を考えて実行していく」ための体制づくり・機運づくりを行政が後押しするもので、事業の主役はあくまでも地域で暮らす住民としている。

本事業への取り組みを通じて、地域内のコミュニケーションを活性化させ、「地域のことは地域で考え、解決していく」という地域づくりの原点を感じてもらうとともに、事業完了後に行政の後押しが無くなった後でも住民の力だけで解決していけるよう、住民の自立性を促すことも大きな目的のひとつとなっている。

3. 事業の概要

本事業は、ワークショップやフィールドワークを行ないながら、地域の課題や魅力・自慢点を探し、その改善策や振興策を住民自身が考え、計画づくりを行ない、計画に沿って実践する。

弊社では、ワークショップやフィールドワークの企画・運営、各資料の作成、アウトプットの整理、地区計画の作成等、事業が運営に進行するよう、様々な方面からの支援を行ってきた。

本事業は平成 18 年度から始まり、これまで下表に示す 9 地区が事業に取り組んでいる。

年度	実施地区名	地域（旧 3 町名）
平成 18 年度	由布川東部 4 地区	挾間地域
	大津留地区	庄内地域
	湯平区	湯布院地域
平成 19 年度	赤野地区	挾間地域
	時松地区	挾間地域
	龍原地区	庄内地域
平成 20 年度	下市地区	挾間地域
	淵 6 区	庄内地域
	川西地区	湯布院地域

ワークショップの手法

本事業を行なうにあたっての基本的な手法として、ワークショップを取り入れた。具体的な展開方法を下記に示す。

地域住民の考えや要望により、内容や手順については協議を行ないながら、全体の流れを構築する。そのため、平成20年度実施地区においても3地区ともに手法や手順にはそれぞれの特徴があるが、下記に基本的な内容と手順を紹介する。

なお、会の最後には、話し合った内容や感じた事等を参加者全員で共有するために、「発表タイム・質問タイム・感想タイム」を設けている。この時間を設けることで、参加者全員が緊張感を保ち、「自分も会議に参加できている」という充実感を持てるように、参加者全員の声を集めるよう配慮している。

回	内容	実施状況
第1回	<p>『地域を見つめ直してみよう』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の魅力、自慢を出し合います ・地域の問題点、課題を出し合います ・魅力、自慢を活かすアイデアを考えます ・問題点、課題を改善するアイデアを考えます 	
第2回	<p>『地域を歩いてみよう』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に地域を歩いてみます ・写真を撮り、メモをとります ・地域の現状をマップにおこします ・これまで気付かなかった何かに気付くことができます 	
第3回	<p>『意見を集約しよう』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの意見やアイデアを整理します ・「何をやるべきか」、「何ができるか」を考えます ・アクションプランをつくります 	
第4回	<p>『地区計画をつくろう』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画推進のための組織を考えます ・アクションプランを具体的に煮詰めます ・地域の全体目標（キャッチフレーズ）をつくります ・地区計画の完成 	

平成 20 年度実施地区の概要

平成 20 年度は、下市自治区ふれあう下市の会（挟間地域）、川西校区まちづくり会議（湯布院地域）、淵 6 区自治区（庄内地域）の、合計 3 地区で事業実施を行なった。

各地区の事業実施概要を以下に整理する。

1. 下市自治区 ふれあう下市の会（挟間地域）

現状

- ・ 年少人口 18.7%、高齢化率 17.9%
 - ・ 子育て世代が多い ・ 大分市のベッドタウン
 - ・ 従来からの住民 4 割、新入住民 6 割の混住社会課題
 - ・ 地域住民のふれあい、まとまりの強化
 - ・ 豊富な歴史資源の活用と次世代への伝承
- 事業へ取り組んだ動機、目的
- ・ 「地域住民のふれあいの場をたくさん作りたい！」

成果と今後

- ・ 「ふれあう下市 輝く未来！」を全体目標に掲げ、【歴史保全・文化伝承班】、【生活環境・安心安全班】、【住民交流・地域活動班】、【環境保全・農村景観班】を創設し、重点プロジェクト及び実施体制を確立
- ・ ふれあい市場の開設【住民交流・地域活動部会】
- ・ 下市の昔散策歩こう会案内マップの作成及び配布【歴史保全・文化伝承部会】
- ・ 災害対策安全マップの作成及び配布【生活環境・安心安全部会】
- ・ みどりの会植樹祭の開催【環境保全・農村景観部会】



写真：下市自治区の全景



写真：事業後の実践状況

2. 川西校区まちづくり会議（湯布院地域）

現状

- ・年少人口 10.9%、高齢化率 32.5%
- ・特性の異なる 9 つの自治区で構成

課題

- ・人口減少、少子高齢化の進行
- ・校区としての一体感、連帯感の醸成が難しい
- ・校区内に暗い話題が多い

（小学校の統廃合、限界集落）

事業へ取り組んだ動機、目的

- ・「子どもや孫に誇れる川西を目指し、
元氣な活動をずっと続けていきたい！」

成果と今後

- ・「かがやいて わくわく にこにこ しぜんランド」を全体目標に掲げ、【歴史と文化を活かした地域づくり】、【豊かな自然を活かした地域づくり】、【川西の魅力を発信する地域づくり】の 3 テーマに分類し、重点プロジェクト及び実施体制を確立
- ・校区のシンボルでもある蹴裂権現周辺で「花いっぱい運動」を展開し、苗木の植栽やプランターへの花植えを実施
- ・継続性を持たせ、一人一人の心に根付く活動を展開していく



図：川西校区の構成

実施状況（2）

校区の象徴でもある蹴裂権現社のある丘に植栽し、プランターに花を植えました。



プランターへの花の植え付け



作業完了

写真：事業後の実践状況

3. 漕6区自治区（庄内地域）

現状

- ・年少人口 6.3%、高齢化率 31.1%
- ・地区全域に棚田が広がっている
- ・豊かな歴史的遺産と農村景観
- ・集会場を起点に、夏の交流事業を開催

課題

- ・少子高齢化と農業の衰退に伴う集落の活力低下
- ・湯平温泉との連携
- ・独居老人や高齢者世帯とのコミュニケーション
- ・地域を盛り上げる上での人材育成
- ・市道（農免道路）開通に伴う交通安全・防犯対策

事業へ取り組んだ動機、目的

- ・「地域の資源を活かして、高齢化に負けない元気な自治区をつくりあげたい！」

成果と今後


- ・「おいしい6区んロード まづやろう!そして楽しもう！」を全体目標に掲げ、【生活・文化】、【環境】、【産業】の3つのテーマに沿って推進チームを結成し、重点プロジェクト及び実施体制を確立
- ・地区民全員に「あーる&できるアンケート」を実施し、「家の周りや中に何があるか？ 自分は何ができるか？」などを調査
- ・アンケートによって発見された有形、無形のお宝を記載した地区のマップ「ろっくんろーどマップ」を作成。地区内外への情報発信ツールとして活用していく。
- ・「ろっくんろーどマップ」を基にした「村まるごと博物館構想」の推進
- ・湯平温泉との連携によるグリーンツーリズムの展開
- ・農産物販売所を兼ねた交流施設の開設



写真：漕6区に広がる棚田

具体的実践状況①

「あーる&できるアンケート」の実施

	一人地区民一人に	Q：家の周りや中に何があるか？
		Q：自分は何ができるか？
		Q：何を作ることができるか？

↓

★豆腐やコンニャクを作れるおばあちゃんが多い
★柚子の木がある家が多い
★ほとんどの家でシイタケを作っている
★お大師様などの神仏が多い

写真：事業後の実践状況

考察

地域住民の自発的な行動につなげ、 地域主動による取り組みが継続していくために

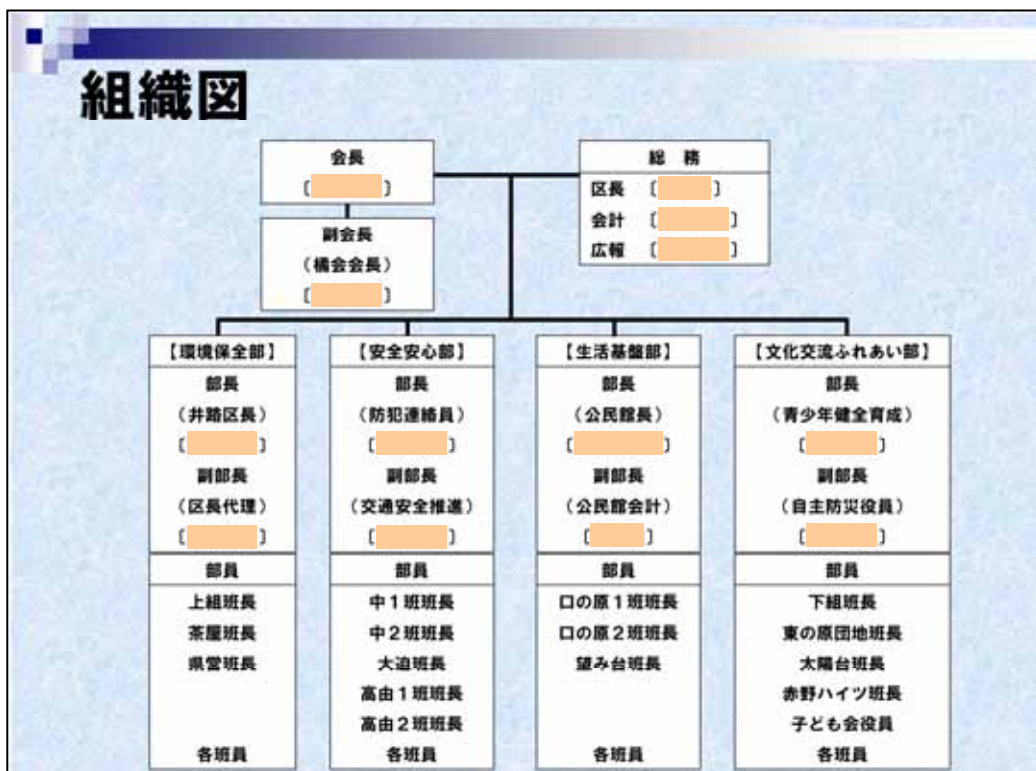
本事業は、3年間の継続事業であり、その期間中、ワークショップ開催の支援の他に、市から経済的支援を受けることができる。言い換えれば、3年後の事業終了からは行政の手から離れ、地域の問題は住民で考え、地域主動で行動を起こしていかなければならない。

得てして、このような事業では行政の手が離れた後に、地域の活動が止まってしまうがちであるが、「住民の自立性のもと、持続可能な地域活動」を創りあげることが、本事業の大きな目的である。

弊社では、地域の様々な活動が短期間で止まってしまうないように、ワークショップのカリキュラムの中で、「地域の将来像」を描き、「実施体制」を構築する事に多くの時間を割いた。「こんな事が問題だ。だから、こんな事をやった方が良い」というようなアイデアは比較的出やすく会議自体も活気あふれるものになるが、「では、実際それを誰がやるのか？」という現実的なテーマになると、議論自体が止まってしまう可能性が高い。

これまでの3年間の事業のなかでも、実施体制を構築する段階が非常に難しい時間であった事は明確であり、この段階をいかに楽しく前向きに話し合うことができるような工夫（カリキュラム・進行・雰囲気づくり等）を研究していかなければいけない。

住民が「行政にやらされている」という意識を持たずに、いかに「自分たちで気付き、自分たちで考え、自分たちで進めていく」という統一した意識の下で進めていくことが、取り組みの継続につながるものであると考える。



図：ワークショップで構築した赤野地区の実施体制
実名が記載されているため、本報告では一部加工（着色）している